

国語問題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二六ページまでである。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合し確認すること。
3. 解答用紙の所定の欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄にマークするか、または所定の欄に楷書で記述すること。(解答用紙は表裏両面にある)
5. 解答は、必ずHBの黒鉛筆を使用すること。
6. 訂正は、消しゴムできれいに消し、消し残さずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。また所定以外のところには、絶対に記入しないこと。
8. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
9. 解答用紙は、持ち帰らないこと。
10. この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
11. この試験時間は、六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

—  
次の文章を読み、後の問に答えなさい。

瓦礫をまえに、失われた人間の生命への悲嘆と追悼を超えて、いま「書物の死」について考えてみようとする。書物が、人間の個としての生命時間をはるかに凌駕する、人類文化の長い時の経過のなかでの集合的な記憶と智慧の厚みある蓄積、そのかけがえなき凝集体として生み出されてきたこと。その事実を諾うかぎり、書物の生と死について思考することは、結局は人間の種としての生命の消息を、より深い振幅と射程において思考することになるにちがいない、と信じながら。書物に降りかかった災厄と死の瞬間を想像し、見とどけることで、

A

をまえにした人間の知をつなぎとめるために。

いまや、さまざまな「追悼」がある。さまざまな「喪」のかたちがありうる。だがどのような場合においても、「悼む」ことが「痛む」と同起源の言葉であるように、私たちの「追悼」には身体への深い痛み感覚がつねに刻まれている。多くの西欧語、たとえばフランス語でも「痛み」*douleur*が「喪」*deuil*と語根を共有しているように、死を追悼し、喪に服すことは、身体と心に刻印された痛苦の感觸を拭うことではなく、むしろそれを内在的に生きることなのであろう。そして書物の死は、そうした内在的な「痛み」と無関係ではない。

書物が瓦礫となり、灰となることの痛み。その痛みを悼むこと。この、書物にたいする歴史的な「喪」の系譜をあらためて緋くことは、書物文化の再生を展望するために必須の手續きとなる。災厄にたいする私たちの身体の痛み、疼きが、書物と瓦礫の風景に意味を与える、私たち自身の感覚的な拠点となるにちがいないからである。

災禍に遭遇した書物がこうむる運命について考えるために、東日本大震災と大津波の後に当事者や関係者から直接聞いた、本に関わる二つの挿話を簡潔に語ることははじめよう。

マグニチュード九・〇という激しい揺れによって多大な被害を受けた東北大学附属図書館。キャンパス内に点在する全館合

わせて約四〇〇万冊の蔵書のうち、約一〇〇万冊もの本が書棚から落下したという。なかでも所蔵していた西欧中世の羊皮紙本をはじめとする **B** のコレクションが受けた打撃は壊滅的だった。ただでさえ脆弱な造りの羊皮紙本などは、落下の

衝撃で大半が壊れ、バラバラになって周囲に飛散した。これらの損傷し、崩れ去った書物を一冊一冊修復することは歴大な人手と時間を要する、ほとんど絶望的なまでに困難な作業である。しかも、大学図書館の収蔵書の破壊という現実は、ある意味では、今回の震災と津波によって失われたすべての書物の存在を想像するための、一つの手がかりに過ぎないともいえる。もともと摩滅や焼失の危険とつねに隣り合わせにある「書物」という存在自体が、今回の災厄に遭遇することですいにその宿命としての死を受け入れざるをえなくなった——そのように総括することは、象徴的な意味で誤りではないだろう。

二〇〇四年一二月に起こった、マグニチュード九・一といわれたインドネシア・スマトラ島沖地震においても、二〇万人を超える人命の損失の裏で、大被害を受けたアチェ州における公文書や古文書の大量の消失や壊滅的な損傷があった。スマトラ島北端に位置するアチェ州は、現在もメッカ巡礼者の最後の寄港地であり、歴史的にもインドネシアにおけるイスラム教学の重要な拠点である。文物と知識の十字路として、そこにはイスラム古文書の大きな集積があったのである。しかし想像を絶する大津波により、アチェ州立公文書館やアチェ・イスラム国立大学図書館などの施設に所蔵されていた歴大な歴史的文書の多くが、泥と水に流され、瓦礫にまみれて失われた。かろうじて半崩壊のまま救い出された書物は、海外の専門家の手も借りながら、真空凍結乾燥という工程を経て修復する努力が重ねられてきたが、すべてを修復することは始めから不可能な課題だった。このときアチェで目撃されたのも、瓦礫のなかで死という免れ得ぬ宿命に服していく書物の姿にほかならなかった。自然の災厄は、書物をそのもつとも原型的な裸の姿に曝し、脆弱さという条件へと引き戻す。書物はこのとき、まぎれもなくおのれの死を宣告されたのだった。

東北の被災地での、震災から一ヶ月半ほどたったもう一つの風景にまつわる挿話もまた、災厄のただなかで書物が引き受け

る宿命について深く考えさせるものだった。普段は首都の大学で教えている一人の国文学者が、自ら印刷した小さな冊子を何十部か抱えて、宮城県南三陸町のいくつかの避難所を訪問したという。そこで彼は小冊子を被災者たちに手渡し、ともに読みながらそれについて語りあうという小さなセミナーのような集いを試みた。冊子に印刷したのは、明治期に生まれた岩手県出身の二人の詩人、石川啄木と宮澤賢治の短歌を自ら選び出したものである。国文学者は、いまだ書物が救済物資として望まれるような段階ではないことをよく知りながらも、精神的荒廃を振り切つて書物的世界へと入つてゆく入口を、その時点における被災者たちといかに共有することができるのか、その可能性に賭けたのだといえよう。

活字の印刷された冊子を手渡された人々は、はじめはおずおずと、国文学者の周囲で遠巻きに様子を眺めるだけだった。すべてを失い、もちろんあたりにも本と名づけるべき何物もなく、そもそも漁民や農家の人間が多い彼らは日常的に本を手にとつて活字を読む習慣を必ずしも持つことのない人々だった。だが、国文学者の準備した短い詩、それが同じ東北の郷土の風光や人間的感情を歌つたものであることが、人々の好奇心を少しずつ開いていった。人間の抱いた想念<sup>イデア</sup>が、文字として書きつけられることで集合的な記憶の分有を可能としてきた書物たち。それらの言葉に注意を向け、それらの言葉が発せられた刹那の想いを、風土に刻まれた無時間の記憶として遡り、それについて考え、感じとろうという集団的な希求の意思が、小さな集いの輪のなかから少しずつ滲み出しはじめたのである。

その場にいなかった私でも、このかすかに華やぎはじめた空気を想像することはできる。そのとき人々の手元にある冊子に印刷されていたかもしれない作品のいくつかを、宮澤賢治の初期の短歌のなかから任意に選び出してみよう。

白きそらは一すぢごと<sup>①</sup>にわが髪を引くこゝちにてせまり来りぬ

せどもののひびわれのごとくほそえだはさびしく白きそらをわかちぬ

汽車に入りてやすらふぬかのまのあたり白く泡だつまひるのながれ  
白光の暮れぞらに立ちてその青木ひたすら雨に洗はれて居り  
青じろく流るゝ川のその岸にうちあげられし死人のむれ

X

宮澤賢治が岩手県花巻で生まれたのは一八九六年。ちょうど同じ年に、歴史的な大津波を引き起こした「明治三陸地震」と、それが誘発したと考えられる巨大な「陸羽地震」が東北地方を襲っている。この偶然は、風土に刻まれた地震と津波の記憶を常時感じとりながら成長したのであろう賢治の自然観に、無視できない影響を与えた。青春時代の心象を深く受けとめる媒体となつた短歌で、賢治はしばしば「白」という色に固執する特異な詠嘆の声を響かせている。現代の被災地を訪問した国文学者もまた、啄木や賢治の歌のなかから意図的に「白」という色にまつわる作品を選びとり、ある特別の「色」に反映された詩人たちの感情の由来を、人々とともに語りあうための導きの素材としたのだという。

二一世紀の津波による瓦礫の彼方に広がる空は、どのような色あいのなかで住人の痛苦と悲嘆を受けとめたのだろうか。一世紀さかのぼる賢治の見た白くたれこめた空、泡立つ白昼の光、打ち重なった死人を洗う青白い川の流れ、群れを離れて海へとくだる一羽の孤独な白鳥……。すべては予言的であり、同時に、書物はすべてを目撃していたとも思える過酷で精緻な風景がそこに書きつけられている。人も自然も白い虚空のなかに消失してゆく世界の破局を見つめながら、歌の言葉はどこかで書物の破局そのものをも暗示しようとしている……。瓦礫に囲まれながら、人々は賢治の詩をつうじて書物の死を透視することがあつたのだろうか。

入江にも、集落にも、避難所にも、いうまでもなく書物は不在だった。災厄は、書物と書物が伝えようとするすべての言葉

を、すなわち人間の智慧と記憶の凝縮を、汚泥と瓦礫のなかに投げ込んで去っていった。だがそのような深い絶望と悲嘆のなかで、人々は不在であるはずの書物の世界に、かすかな光を求めようとした。詩句のなかで白く泡立つ光の痕跡が、人々の休らいぬ脳のなかで、かすかな発見と希望の種子をはぐくんだ。被災直後から、ものを読むと文字が紙の上に浮き出して揺らぎ、いっさいの読書からソガイ<sup>a</sup>されていた人々の眼が、書物の方へとゆっくり回帰する瞬間だった。もちろんそのとき、書物の不在は、言葉への希求が新たに芽生えるための、むしろ条件にほかならなかった。<sup>③</sup>不可視の書物が、書物の瓦礫のなかからふたたび生まれ出ようとしたのである。

図書館での本の崩壊。集落での本の不在。災厄による書物の消失の光景は、私たちに究極的には何を語るのだろうか。それは簡潔なひとつの真実を語っているのだろう。つまり、書物はかならず終わりあるモノである、というゆるぎない真実である。紙とインクと糸。すなわちそれは、はかない、有限性のもとに条件づけられた物質の組み合わせにすぎない。だが書物が終わりあるモノであることは、それが物質<sup>マテリアル</sup>としての身体性をそなえた、豊かな有機的存在であるという確信をも同時に私たちに植えつける。それが死すること。死する運命にあること。瓦礫となり、灰となる終の命を全うする書物の姿がかたわらにあることで、私たちはそれが、自らも死を免れない人間自身の姿が投影された至高の存在であることを直観する。物質としても、思念<sup>イデア</sup>の結晶体としても。

瓦礫を前にして書物について考えるときのもう一つの教訓。それは、書物が、歴史的に思考し行動してきた人間の記憶を凝縮して蓄積する、いわば時間の C である、という事実の発見である。宮澤賢治の短歌のなかに封じ込められた東北という風土を襲う破局の記憶。現在からみれば一世紀以上もさかのぼる出来事が風土に刻んだ集合的記憶の刻印を、被災地の人々は書物のなかに堆積してきた詩の言葉のなかからとり出し、「いま」に鋭く接触させようとした。同じことは、災厄のたびごとに、いくらでも起こっている。賢治が生まれた年、<sup>④</sup>ラフカディオ・ハーンは日本において明治三陸地震に遭遇し、当時から

さらに半世紀さかのぼる安政南海地震の天津波をめぐる口頭伝承を繙きながら「生神様」A Living God という物語を英語で書き記して世界に“tsunami”なる語を初めて伝えた。太平洋戦争末期の大空襲下、作家堀田善衛は爆撃による烈風と火災のなかで陥った知性の真空状態から脱するために、『方丈記』における鴨長明が目撃した大火と竜巻と飢饉の壮絶な描写に、遙かなる過去からの救いの言葉を求めた。ナチズムの席卷するヨーロッパの暴力と戦争について問うために、シモーヌ・ヴェイユはホメロスの『イリアス』に込められた、古代ギリシアの戦争廢墟にこだまする無垢なる「力の寓話」へと立ち還っていった……。

そう、誰もがみな、瓦礫を前にして、現在を即時的に切り取るだけの報道や伝聞や政治の言葉から離れて、<sup>⑤</sup>遠いところにより本質的な言葉を探しに行ったのだ。<sup>b</sup>ヒキンな言葉遣いがたどり着くことのできない真実を求めて。その遠い言葉の源泉こそ、記憶の堆積としてある書物、叡知の C としてある書物にほかならない。災厄はそのことを人々に教えた。瓦礫の風景のなかで不意に訪れた書物の不在が、記憶の結晶として生きながら死んでゆく書物という実在のかけがえのなさを、逆に深く人々に確信させたのである。

(今福龍太『書物変身譚』による)

問一 傍線 a、b のカタカナを漢字に直しなさい。

問一 空欄A、B、Cに入る語の組み合わせを次の中から一つ選びなさい。

- |   |           |       |           |
|---|-----------|-------|-----------|
| 1 | A カタルシス   | B 手稿本 | C アーカイヴ   |
| 2 | A カオス     | B 転写本 | C メモリーバンク |
| 3 | A カオス     | B 稀覯本 | C ミュージアム  |
| 4 | A カタストロフィ | B 手稿本 | C ミュージアム  |
| 5 | A カタストロフィ | B 稀覯本 | C アーカイヴ   |

問二 傍線①「書物の生と死について思考することは、結局は人間の種としての生命の消息を、より深い振幅と射程において思考することになるにちがいない」とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄に当てはまる二十七字の表現を本文中から抜き出し、最初と最後の三字で答えなさい。

書物が、

であるから。



問四 傍線②「書物的世界」とはどのような意味か。もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 天災以前の風景や人々の生活を知り、風光明媚であった郷土を想起できる世界
- 2 郷土の災害に関する情報を電子図書館として保存し、国際的に活用できる世界
- 3 郷土の過去の災害の記録を読み、今後の危機管理に活かすことのできる世界
- 4 郷土に住んでいた人々の記憶や情念に触れ、それを分かち合うことのできる世界
- 5 郷土で活躍した人々の偉業や過去に起きた重要な出来事を再確認できる世界

問五 空欄Xに入る短歌としてもつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
- 2 翼わたしの魂のせて幻想の波の上白鳥は舞ふやうに
- 3 わが小舟に雨に濡れつつ白鳥とうち並びいく二時ほど
- 4 日本海渡りて来たる白鳥のしろき群より羽搏き聞こゆ
- 5 ましろなる羽も融け行き白鳥はむれをはなれて海にくだりぬ

問六 傍線③「不可視の書物が、書物の瓦礫のなかからふたたび生まれ出ようとしたのである」とはどういうことか。もつとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

1 人々が、今までは見向きもしなかった書物に活路を求め、自らのやりきれない思いを吐露することで苦境を乗り越えようとした。

2 人々が、天災という筆舌に尽くし難い経験を通じ、自らも書物と同様、いつかは死を迎える有限なる存在であることを痛感した。

3 人々が、被災以前には過去の遺物としか見てこなかった書物の中に、言葉の力を生きていく糧とするための光明を見出した。

4 人々が、過去の災害を記録した古い書物にこそ、未曾有の天災から復興するための指針が示されていることに気づき始めた。

5 人々が、のちの時代のために、文字によって自らの体験を記録し、それらを書物として保存する必要があることを実感し始めた。

問七 傍線④「ラフカディオ・ハーン」について、この人物の説明として適切ではないものを次の中から一つ選びなさい。

1 ハーンは、一八九〇年に来日し、『知られざる日本の面影』や『菊と刀』等の書物を著したことで、日本文化の紹介者として知られる。

2 ハーンは、アメリカの出版社の通信員として来日したが、その後、英語教師となり、熊本、神戸、東京などで英語や英文学を教えた。

3 ハーンは、日本各地の民話や伝承を集め、それらを英語でまとめた書物を記したが、『怪談』はその代表的な著作として有名である。

4 ハーンは、一九〇三年に英文学講師を勤めていた東京帝国大学を退職するが、彼の後任はイギリス留学から帰国した夏目漱石だった。

5 ハーンは、「小泉八雲」という名を用いたが、「八雲」とは彼が住んだことのある島根県松江市の旧国名「出雲国」の枕詞に由来する。

問八 傍線⑤「遠いところにより本質的な言葉を探しに行ったのだ」とはどういうことか。この文を具体的に示す例として、  
とも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 マスメディアによる報道記事を涉猟し、事件の核心を捉えたものを突き止める。
- 2 書物に記された過去の人々の言葉に、困難に立ち向かう精神的原点を求める。
- 3 インターネットの検索機能を駆使し、世界中で発信される最新の情報を追跡する。
- 4 現地まで足を伸ばし、関係者にインタビューをして被害の詳細な把握に努める。
- 5 苦痛に喘ぐ人々の心を安らぎへと導き、死者を追悼する祈りの言葉を探し求める。



次の文章を読み、後の問に答えなさい。

記憶は意識と無意識とを縋かいませながら遠い過去から現在に至っている。現在この瞬間に、

A

はその水面に浮ぶあ

らゆる印象を受けとめるが、やがて次の瞬間には印象はさまざまの破片に分裂し、その或るものは早く或るものはゆるやかに海の底へ沈み始め、それらは常に記憶によって意志的に保存されているものと、いつかは甦る可能性を持ちながら

B

界の周辺に浮遊しているものと、そして海底に埋没して永久に浮び上る機会を持たないものとに分れるだろう。それは心理学の用語を使えば、記銘力と

C

的記憶の再生とそして忘却ということになるのだろうが、私の場合に記憶の水量は極めて貧しく、特に幼年の記憶は恥ずかしい程少い。それは勉強のための記銘力とは多分関係がないだろうし、私も受験勉強をし

ていた中学生の頃は苦手の学科のために「代数学辞典」と「幾何学辞典」とを第一頁から丸暗記したこともある位だが、しかし忘れっぽい性質だということは自分でも認める。そして私が幼年時代のことをまるで忘れてるのは、そこに何等かの理由がなければ、ただ忘れっぽいというだけでは済まないだろうし、既に東京に来てから暫く経った頃でも、

子供はもう以前のことを忘れていて、思い出す能力がなかった、或いは思い出すという意志を持たなかった、或いは意志が働いてもその効果がないので次第にそのことを諦めた、或いは思い出すことに耐えられなかった、

そのいずれかであつたらうと私は思うが、そこに記憶を回復し復習する手段がなかったことも理由のうちに数えられるだろう。何しろ私の父は過去のことに関しては頑なに口を噤あんでいて、亡くなった母を思い出させるようなことは決して言わなかったし、恐らくは父自身も母の記憶を大事にしていたから(そしてそれは同時に自分の息子に対する愛情の表現でもあったのだ)その後二十年の間、つまり私が大学を出て一人で歩けるようになる迄、独身を続けたのだろうと私は思う。しかしただそれだけが、追想の契機がなかったことだけが、理由とはならない筈である。人は思い出す時に楽天的な傾向を持ち、不愉快

快な体験は、それが不愉快だったことだけは覚えてはいるが、その事件の具体的な詳細はすぐに忘れてしまうと心理学では教えていて、私の場合の最も不愉快な体験は勿論母の死であり、そのためか母の死に関して私は（今も昔も）まるで覚えていない。

母は病院で死んだが、その日附の他は、どこで、どういうふうにも、どんな病気で死んだのかさえも知らなかった。その時弟が生れ、母は産褥熱で亡くなったと後に聞かされても、またその小さな赤んぼが家に帰って来てからは乳母をたのむのにどんなに苦勞をしたか、それは父がその乳母の健康状態について口やかましい註文を出したせいだが、その話を数年前に佐世保の伯父から説明されても（というのはその田舎から来た乳母を世話したのは伯父だったから）、私には赤んぼのことも乳母のことも伯父のことも、まったく思い出せなかった。母の葬式のこと何ひとつ覚えていない。そこにあるものは一切を闇の中に掻き消してしまう暗黒星雲のような一つの死であり、死の前後には虚無の空間が滲はてしなく幼年の宇宙にたづなっていて、そこから嘗て私に親しかった地名が、木霊bのように響いて来るが、それさえもごく漠然とした印象にすぎず、

大宰府、そこには紅梅白梅が咲き太鼓橋があり、

二日市、そこには肥前屋という宿屋があつてそのおばあさんは早口の博多弁をべらべらと喋り、

水城、その村には蓮華草ずんげの生えている田圃が続き裸足で歩くのは気持がよかつたし、

博多、それは古びた瓦屋根と水の流れる音であり、朝ごとに売りに来る「おきうと」売りの呼声であり、

横浜、そこではやさしい女の子が子供を呼んでいる、

佐世保、それは遠い遠いところ、

大牟田、そこには煤煙に煙った汽車の窓からの風景があり、

唐津、そこには松風の音、

そしてそれらの地名が私に何等かの意味を持っている筈なのに、<sup>①</sup>私はその前後関係を見定めてそれぞれの星座に収めること

が出来なかつた。一体なぜ私は、私だけが、幼年の記憶を失ってしまったているのだろう。人は私のそのような空白を或いは啞い或いは憐むが、それを一番悲しんでいるのは私自身なのだ。私は父や伯父から教えられて過去の大略を知ってはいるが、それは私自身の純粹記憶と必ずしも結びつかず、だいいちまるで人事ひしじのような気さえする。記録はごく僅かで数行で足りる。

——私は大宰府に通じる二日市の駅前にあつた旅館肥前屋の離れで生れた。そこは海軍の伯父の養家に當っている。その頃父はまだ大学生で東京にいた。母は私を連れて佐世保の実家に戻り、父は七月に大学を出て或る銀行の横浜支店に勤務し、翌年借家を見つけて母と私とを横浜へ呼んだ。数年後に母は健康を害して佐世保に戻り、やがて父が福岡支店勤務になつたので、親子は福岡に住むようになった。関東大震災より以前のことである。浪人町や大名町や唐人町などの借家を転々とし、やがて私は小学校へはいつた。私が二年生の春、弟が生れ、母が死んだ。翌年の春、父が東京転勤になつたので父と私とは弟を抱いた乳母と共に東京へ移つた。——それだけである。しかし私は長い間、私が東京へ来たのは母が死んだその同じ年だと信じていた、つまり私には弟が生れてから尚も福岡にいた一年間の記憶がなかつた。そしてこの弟は海軍の伯父に養子に貰われ、その家で中学を卒業した年に十八歳で死んだ。伯父の方もその数年後に死んだ。そして私は、弟には産みの母の記憶がある筈もなかつたから、彼にとつて幼年とは何だつたのだろう、私のそれよりも一層暗い闇というにすぎなかつたのだろうかと考えるが、私は生前にそれを彼に訊いたこともなく、また最早決して訊くことは出来ないのである。

そして私の記憶のうちで、半ば夢のような手応えのない破片としてではなく、一つの纏まとりのある情景として浮んで来る最も古いものは、父に連れられて福岡から東京に来た時のこの長い汽車の旅の記憶である。その頃の長距離列車がどれ程の時間を必要としたか私は知らないが、私の記憶に拠れば関門海峡を船で過ぎる時はまだ昼のうちで、下関から汽車に乗って夜になり、汽車の中でやがて夜が明けると長い一日が過ぎて、夕闇の濃くなつた東京に到着した。それは私が嘗て経験したことのない



い大旅行で、関門海峡を船で渡るのも初めてなら、寝台車の上の段に寝て、ごとごとという車輪の響きが衰えやがて静まるたびに聞き取りにくい駅名が告げられるのを夢み心地で聞くのも、昼のあいだ二等車の座席から硝子窓を通して新鮮な風景を眺めるのも、すべて胸のわくわくするような体験だったが、

お父ちゃん、あれは何、

お父ちゃん、ここはどい、

とうるさく尋ねていたことは覚えていても、そこに小さな赤んぼを抱いた乳母が一緒だったことはまるで覚えていず、従って必ずしも完全な記憶だとは言えないだろうが、後に雑司ヶ谷に住んでいた頃、

目白の駅のあたりを貨物列車の通るがたんごとんというかすかな音を寢床の中で聞く度に、子供は青い火花を上げて軋っている長いレールや、その上を過ぎて行く機関車のむくむくした蒸気や、赤や青の電気が点いたシグナルや、人影のちらちらする信号所や、そういったものを必ず眼の前に思い浮べていたし、それは紛れもなくこの時の体験に源を得ていたに違いなかった。そして二つの地点を結んで走る列車は

D

にとつては現在から過去へ戻るための最もよい契機であり、特に夜行列車は、窓をまらめ燦かせて流星のように空間と時間とを駆け抜けて行き、記憶の不確かな地帯を、そこだけ明るく照し出すのである。しかしそれが過ぎてしまえば、あとはまたもとの闇に戻り、そうした追想を繰返すことによって人は次第に過去から遠ざかって行くのだろうが、その時もまた

子供が遠ざかりつつあったのは彼の住んでいた故郷からというばかりでなく、彼が生きて来た幼年という時間のすべてからであり、彼は驚嘆の眼を大きく見開き、新しく視野にはいつて来る一切のものを見失うまいと決心して、時々刻々に感動しながら、未来は常に測り知れない驚きに充ちて現在に滲透して来るものだということを、無意識のうちに知りつつあった。即ち

② 過去の空間と時間とから遠ざかりつつあると共に、彼は新しい空間と時間とを目指して運ばれつつあり、やがて夕闇が濃くな

ると共に急行列車は一段とスピードを増し、彼の知らなかった大都會の夜は明るい燈火の燦きを窓の外の視野に点々と鑲め、その数は次第にひろがって行き、二等車の中にも到着を間近に控えた乗客のざわめきが高まって行く間に、——子供は古い町も、川の音も、菜の花畑も、松露の香りも、「おきうと」売りの呼声も、軍艦の浮んでいる港も、小学校の友達も、おぶさった時の髪油の匂も、そしてあのやさしい声も、

坊やはどこへ行ったの、早く帰っていらつしやい、

その声さえも今はもう彼の背後の闇の中に残し、すべての過去の記憶が夢のように消え去るにまかせながら、多くの期待と少しばかりの不安とに心をいっばいにして、彼のこれから住むべき大都會を目指して走る列車の振動に小刻みに身を揺すられていた。

(福永武彦『幼年』による)

問一 傍線 a、b の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 空欄 A、B、C には「意識」または「無意識」が入る。その組み合わせとして適切なものを次から一つ選びなさい。

- |   |       |       |       |
|---|-------|-------|-------|
| 1 | A 意識  | B 意識  | C 無意識 |
| 2 | A 意識  | B 無意識 | C 無意識 |
| 3 | A 意識  | B 無意識 | C 意識  |
| 4 | A 無意識 | B 意識  | C 無意識 |
| 5 | A 無意識 | B 意識  | C 意識  |

問三 この文章は段落の切り換えが独特であるが、作者はどのような意図で段落を区切っているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 明の世界と暗の世界を代わる代わる切り換え、走馬灯のような幼年の世界の陰翳を表そうとしている。
- 2 故郷と都会を自在に往復運動しながら、魂の源のような幼年の世界への回帰願望を表そうとしている。
- 3 主観的な主体と客観的な主体を突如として交代させ、幼年の世界を視点を変えて表そうとしている。
- 4 意識と無意識の間を融通無碍に飛び交い、幼年の世界の神出鬼没さを効果的に表そうとしている。
- 5 現在と過去という時間を自由に往き来しながら、幼年の世界の時間的な揺らめきを表そうとしている。

問四 空欄Dに入る適切な言葉を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 傍線①「私はその前後関係を見定めてそれぞれの星座に収めることが出来なかった」とあるが、それはなぜか。もっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 幼年の記憶を無理に現実と関係づけても、結局は虚無の空間に戻っていくから。
- 2 さまざまな地名が結びつけば、特定の土地に縛られない幼年の記憶が失われるから。
- 3 記憶の前後関係が定まれば、時を越えた純粹記憶がばらばらになってしまうから。
- 4 記憶には、星座のように固定されることを拒否する自由な運動性が必要だから。
- 5 個々の記憶の繋がりをつければ、母とその死の記憶を思い出してしまうから。

問六 傍線②「過去の空間と時間とから遠ざかりつつある」とあるが、ここでの「空間」と「時間」を示す語をそれぞれ本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

空間↓

X

時間↓

Y

問七 本文において記憶に関する筆者の考えにもっとも近いものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 人の死に関する記憶をいつまでも持ち続けていると、未来の人生を切り開いていくうえで障害となることもある。
- 2 人の最も重要な記憶は無意識に沈んでしまっているが、常に大きな意味を伴って深い所から語りかけてくるものだ。
- 3 記憶は自分には制御できない無意識の世界と深く結びついているので、無理に近づこうとすると失うことになる。
- 4 子供が成長していく中で、記憶自体も変容を遂げ、現実の生活に適応できるように日々更新されてゆくものだ。
- 5 ときどき現在から過去を振り返ることによって、すべての記憶が夢のように消え去るのを防がなければならない。

問八 小説『幼年』は多くの小さな断章から構成され、断章ごとに題がつけられている。問題の文章はその最後の二つで、前半と後半の切れ目には一行分の空白がある。それぞれの題を本文中の語句で五字以内で抜き出して答えなさい。

問九 福永武彦とともに『1946 文学的考察』を著し、戦後の文壇に新風を吹き込んだ小説家と評論家の組み合わせとして

正しいものを次の中から一つ選びなさい。

1 大岡昇平・中村光夫

2 池澤夏樹・四方田犬彦

3 大江健三郎・江藤淳

4 中村真一郎・加藤周一

5 太宰治・小林秀雄

次の文章は複数の人物(女性)が集まって様々な話題について議論しているものである。これを読み、後の問に答えなさい。

「あはれ、折につけて、三位入道のやうなる身にて、集を撰びはべらばや。『千載集』こそは、その人のしわざなれば、いと心にくくはべるを、あまりに人にところを置かるるにや、さしもおぼえぬ歌どもこそ、あまた入りてはべるめれ。何事もあいなくなりゆく世の末に、この道ばかりこそ、山彦の跡絶えず、柿の本の塵尽きず、とかやうけたまはりはべれ。まことに、聞き知らぬ耳にもありがたき歌どもはべるを、主のところにはばかり、人のほどに片去る歌どもにはかき混ぜず撰り出でたらば、いかにいみじくはべらむ」

「いでや、いみじけれども、女ばかり口惜しきものなし。昔より色を好み、道を習ふ輩多かれども、女の、いまだ集など撰ぶことなきこそ、いと口惜しけれ」と言へば、

「必ず、集を撰ぶことはいみじかるべきにもあらず。紫式部が『源氏』を作り、清少納言が『枕草子』を書き集めたるより、さきに申しつる物語ども、多くは女のしわざにはべらずや。されば、なほ捨てがたきものにて我ながらはべり」と言へば、

「さらば、なか、世の末にとどまるばかりの一ふし、書きとどむるほどの身にてはべらざりけむ。人の姫君、北の方などにて隠ろへばみたらむはさることにて、宮仕人としてひたおもてに出で立ち、なべて人に知らるばかりの身をもちて、『このころはそれこそ』など人にも言はれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみなむは、いみじく口惜しかるべきわざなりかし。昔より、いかばかりのことかは多かめれど、あやしの腰折れ一つ詠みて、集に入ることなどに女はいとかたかめり。まして、世の末まで名をとどむばかりの言葉、言ひ出で、し出でたるたぐひは少なくこそ聞こえはべれ。いとわざな んめり」など言へば、

例の若き人、「さるにても誰々かはべらむ。昔、今ともなく、おのづから心にくく聞こえむほどの人々思ひ出でて、その中

に、少しもよからむ人のまねをしはべらばや」と言へば、

「ものまねびは人のすまじかなるわざを。淵に入りたまひなむず」と言ひて笑ふ。

「女御、后は、心にくく、いみじきために書き伝へられさせたまふばかりのは、いとありがたし。まして末々はことわりなりかし。色を好み、歌を詠む者、昔より多からめど、<sup>⑥</sup>小野小町こそ、みめ、容貌も、もてなし、心遣ひよりははじめ、何事も、いみじかりけむとおぼゆれ。

<sup>⑦</sup>色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

侘びぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

と詠みたるも、女の歌はかやうにこそとおぼえて、そぞろに涙ぐましくこそ」

〔無名草子〕による

(注) 主……三位入道のこと。

片去る……片方による。気を遣う。

さきに申しつる物語ども……この問題の文章の前にある、物語についての議論をさす。

問一 傍線①「三位入道」に当てはまる人物を次の中から一つ選びなさい。

- 1 藤原公任
- 2 藤原道綱
- 3 藤原俊成
- 4 藤原兼輔
- 5 藤原定家

問二 傍線②「人にところを置かるる」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 うぬぼれの強い人から敬遠される
- 2 有力な人物に対して遠慮なさる
- 3 能力のある人に対して控えめになる
- 4 人より優位に立つことができる
- 5 目上の人としての待遇を受ける

問三 傍線③「捨てがたきものにて我ながらはべり」とあるが、これはどのような意見に対する反論であるか。その意見を本文

中から十字以上十五字以内で抜き出しなさい。



問四 次は傍線④「書きとどめられぬ」の「られ」と「ぬ」について文法的に説明した文である。空欄AからFに入れる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選びなさい。

「られ」は  の意味を表す助動詞  の  形であり、「ぬ」は  の意味を表す助動詞  の  形である。

- |   |   |    |   |    |   |    |   |    |   |   |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|---|---|---|----|
| 1 | A | 受身 | B | らる | C | 未然 | D | 打消 | E | ず | F | 連体 |
| 2 | A | 可能 | B | る  | C | 連用 | D | 完了 | E | ぬ | F | 終止 |
| 3 | A | 可能 | B | らる | C | 未然 | D | 打消 | E | ず | F | 終止 |
| 4 | A | 可能 | B | る  | C | 未然 | D | 打消 | E | ぬ | F | 連体 |
| 5 | A | 受身 | B | らる | C | 連用 | D | 完了 | E | ぬ | F | 連体 |

問五 傍線⑤「腰折れ」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 老人の歌
- 2 和歌の第三句目
- 3 骨を折って詠んだ歌
- 4 下手な歌
- 5 和歌の下の句

問六 空欄Xに入れるのもっとも適切な形容詞を本文中から探し、この部分に合う形に活用させて五字以上で答えなさい。

問七 傍線⑥「小野小町」について、『古今和歌集』の仮名序で述べている、この人物の歌の批評として正しいものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 ことばは巧みにてそのさま身に負はず
- 2 あはれなるやうにてつよからず
- 3 心あまりてことばたらず
- 4 ことばかすかにして始め終はり確かならず
- 5 歌のさまは得たれどもまこと少なし

問八 和歌では自然の情景を人の世に重ね合わせて詠むことがある。傍線⑦「色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」の歌と同趣の比喩を用いている歌としてもっとも適切なものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける
- 2 世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし
- 3 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ
- 4 春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみむ
- 5 思ふともかれなむ人をいかがせむあかず散りぬる花とこそ見め

問九 本文中の人々の発言の内容と一致しないものを次の中から一つ選びなさい。

- 1 女であると制限されることが多い気がして面白くない。
- 2 宮仕え人は常に人目にさらされているので、評判が気になる。
- 3 勅撰集の選者にはなれなくても、後世に作品が残ればよい。
- 4 姫君や北の方は世間の人に知られることがなくつまらない。
- 5 女が勅撰集の選者になったことがないとはまことに残念だ。